

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.5〉

〈東岐波② 課題とキーマン〉

人口は市内でも上位の東岐波だが、他の地区と同様に高齢化や地域活動に携わる若手の育成、地域活性化といった課題の解決が求められている。土地の特性を生かし、住民らが結束して地元を盛り上げようと、東岐波里海再生の会（寿恵村泰生会長）が、黒崎自治会館近くにある800平方メートルの畑でオリーブの栽培に力を入れている。

オリーブ栽培、交流の懸け橋に



オリーブ栽培に力を入れる会員たち（黒崎の畑で）

化粧品事業スタート、ブランド化目指す

同会の創設は20年近く前にさかのぼる。潮干狩りの名所を誇っていたキワ・ラ・ビーチの干潟再生に向けて動きだしたのが始まりだ。その後、小野地区が始めたオリーブの栽培に興味を持った寿恵村会長（85）は、日本の産地である小豆島のオリーブ専門家に、東岐波でも栽培が可能か見てもらった。本場の地中海のよう、穏やかな気候の瀬戸内海に面した黒崎はオリーブの成長に適していると言われ、栽培に踏み出した。

2016年12月に苗木70本を植え、翌年には初収穫。パスタのトッピングにも合う新漬けに加工して東岐波ふるさとまつりで販売した。現在は、新漬けとジャムのような黒糖漬け、乾燥させた葉を使ったオリーブ茶をJAの農産物直売所「新鮮館」の厚南店とサンパークあじす店、通販サイト「うべわくわく市場」などで売っている。

時期によって差はあるが、月2回のペースで畑の手入れを行う。作業が一段落すると、簡易テーブルと椅子を並べて茶話会の時間。持ち寄った菓子やジュースを味わいながら、今後の作業工程や近所のニュースで話弾み、笑みがこぼれる。「楽しむことが長続きの極意」が同会のモットー。会員は多少入れ替わったが、12人の半数が80歳代。

それでも元気に約20年間、作業をこなしてこれたのは、日々の小さな楽しみがあるからだ。

収穫期は10月中旬〜下旬。昨年から中学生がボランティアとして参加し、会員と共に籠いっぱい、実を摘み取った。収穫を体験した子どもたちが将来、東岐波でオリーブ事業を継いでくれればと願う。

さらに今年から、オイルを使った新事業として、山陽小野田市の山口東京理科大学と連携した化粧品の製造が決まった。「東岐波の化粧品」としてブランド化を目指す。寿恵村会長は「人生100年時代。みんなが貢献しながら健康長寿な地区にしたい」と笑顔で語った。